



# アズナーハンター



1

夏川 宙

アズナーハンター

# アズナーハンター

## 第一章 臨海副都心

1

「アズナーだ——っ!!」

「助けてっ！」

「きゃ——!!」

複合商業施設オダイバ・シテイ内の人混みから、数多の悲鳴がわきあがった。

巨大な吹きぬけに、円状・グリーン<sup>①</sup>の輝きが矢継ぎ早に生じ、そこから、不気味なゴツゴツした銀色紡錘形マシン——アズナーが、耳障りな音をまき散らしながら、猛然と飛び出してくる。

「時間停止！」

高校生の賢<sup>けん</sup>が、落ち着いた声で言った。

凍りついたかのように、人々とアズナー群の動きが止まり、辺りを絶対的な静寂が支

# アズナーハンター

配した。

直径2mほどのブルーに輝く円筒状エネルギーフィールドが、一瞬で賢をすつぽりと包む。

フィールド内部、賢の前方の空中に、突如コンソールが出現した。

2Dモニターには、各種情報——アズナーのネーム・形状・サイズ、EPビームライフルやEPアーマー等の武具類の画像・性能など——が表示されている。

「敵はテルブか。この武装でOKだ」

賢が素早くキーボードを叩くと、賢のスマートな長軀を覆うようにEPダークブルーアーマー、手の位置にEPビームライフルとEPレーザーピストルが、忽然と現れた。

「やってやるぜ！」

数秒程して、ブルーエネルギーフィールドが消滅し、時が息を吹き返した。

「食らえっ！」

ビームライフルのトリガーを絞る。

イエロービームが、テルブ目がけて突き進み、命中する。

宙にオレンジ色の光を煌めかせ、テルブが砕け散った。

けたたましい爆音が、耳を打つ。

「一丁上がり！」

## アズナーハンター

「そのハンサム君、援護して！ 格闘攻撃をしかける！」  
賢の左・およそ5mの位置から、舞が声をかけた。

20代、ライトブラウンに染めたロングヘアの、グラマー美女である。

グリーンベースの洒落たツーピースに身を包み、EPレッドプロテクターを装着している。

「了解した」

舞が、テルブ群へ向けて、信じられないスピードで突進する。

支援のイエロービームが舞の後方からテルブへ襲いかかり、火球に変えた。

「やるじゃない」

EPアーマー左肩部に装備された小型スピーカーから、舞の声が流れてくる。

「へへっ」

「……墜ちろっ！」

ブルーの輝きを放つビームブレイドが、テルブを真っ二つにし、爆発光が閃く。

賢の効果的な援護射撃の中、舞は、EPビームソードで切り下ろし、薙ぎ払い、突き刺し、次々とテルブを駆逐する。

名前通り、舞うような華麗な身のこなしで、テルブ群と苛烈な接近戦を行っている。

1体のテルブが、先端に装備されたメタルスパイクで突き刺そうと、至近距離から舞

## アズナーハンター

へ突進した。

「当たるもんですかつ！」

舞は、サイドステップでテルブを躲かわして素早く翻身し、テルブの後ろから斬撃を浴びせる。

光の花が咲き、爆発音が響いた。

テルブ群は、舞に攻撃を集中しており、群衆は、攻撃を受けることなくオダイバ・シテイ外へ逃げてゆく。

ブルービームブレイド、イエロービーム、オレンジの煌めき、爆音が乱舞し、見る見るテルブ群の数は減少してゆき、やがて殲滅された。

アズナーの残骸は消滅するため、周囲に存在するテルブの痕跡は、焦げた金属の不愉快な臭いのみだ。

賢と舞は、無傷である。

「やったわね。ナイス援護！」

「あんたも、いい腕だ」

「サンキュー」

「……外に、テルブが2群、アズナーハンターが7人いる」

と、EPアーマー左手首部に装着した、ハンターPDAのモニターを見ながら、賢。

# アズナーハンター

「ハンターがヴィーナスフオートレスとダイバテレビビルにいるため、テルブ群は1群ずつその2施設に向かっていているみたい」

「だな。——テルブは、たいして強くない。ハンターに蹴散らされて、海に逃げられると厄介だ」

「確かに」

「——ダイバーズ海浜公園で、待ち伏せしよう」

「……そうね」

賢と舞は、猛速で走ってオダイバ・シティから出、巨大ロボ“ガンラム”像を背にして、ダイバーズ海浜公園に急いだ。

アズナーが地球に現れたのは、5ヶ月ほど前である。生物型、非生物型のアズナーが存在し、どちらにも極めて多数のバリエーションがある。

その正体も目的も、不明だ。

アズナーは、世界中の人間達を無差別に攻撃し、大量に虐殺した。

無論、人類はアズナーに反撃を試みたが、いかなる兵器もアズナーには通用しなかった。

## アズナーハンター

水爆の直撃を食らってすら、アズナー達は全くの無傷だったのである。

人類が恐怖におののき、パニックに陥った頃、エピソードと称する謎の存在が人類に救いの手を差し伸べた。

エピソードとハンター契約をかわした者には、ハンターPDA、特殊な武具——アズナーに対して有効なもの——、少量のエピトウという通貨が与えられるのだ。

彼らは、アズナーハンターと呼ばれる賞金稼ぎである。

基本的には、エピソードが指定したアズナーを制限時間内に全滅させると、全滅に貢献したアズナーハンターが、貢献度に応じたエピトウをエピソードから授与されるシステム。

アズナーハンターは、アズナーに最優先攻撃目標とされるため、非常に危険な職業だ。アズナーとの戦闘で負傷して逃げても、戦況によっては、アズナーがしつこく追ってくるのである。

ただし、とんでもない褒美も存在する。

1000兆エピトウを貯めたアズナーハンターは、それと引きかえに、どんな願いでもかなえる事が出来るのだ。

全知全能の神となる事も、不老不死の人間となる事も、死者を蘇らせる事も、宇宙の物理法則や歴史を全く別のものに作りかえる事も、思いのままなのである。

それはまさに次元の異なるメリットで、通常、稼いだエピトウは、より強力なアンチ

# アズナーハンター

アズナー―武器の購入、アンチアズナー―武器の修理、円やドルとの交換などの用途に使用される。

様々な者達が、様々な動機で、アズナーハンターとなっていた。

事故死した妹を生き返らせる、意中の人を自分の恋の虜にする、アズナーに殺された親の敵討ち、リストラされたので生活費を稼ぐ、生死に関わる戦いのスリルを味わう、面白そう……

避難命令によって無人となったダイバーズ海浜公園——東京湾に接している——に、2人のアズナーハンターが姿を見せた。

海に目を向けると、巨大海上都市「ザ・シテイ」の威容が望見される。

一辺5 kmの正方形の都市基盤上に、雲を突き抜ける超高層ビル群、多種多様な形状の建造物群、無数の兵器などが存在する。

「ザ・シテイ」は、エピソードの出現の直後に、東京湾に忽然と姿をあらわした。

この都市は何らかの活動を行っているが、住民の姿は皆無だ。

住民がいるとすれば、透明又は常にステルス状態にある、何か（知的生命体・ロボットなど）であろうと考えられている。

接近する物を見境なく攻撃し、いかなる攻撃も通用しない——対アズナー―用兵器によ

## アズナーハンター

る攻撃も効かない。

アズナー同様、その目的も正体も不明だ。

「……ダイバテレビビルのテルブは全滅した。ヴィーナスフオートレスのテルブどもは、やはり、ここに向かっている」

賢が、ハンターPDA——周辺マップ、アズナーハンターとそのネーム、テルブが表示されている——を見ながら言った。

「凶星ね。鋭い読みだわ」

と、冷静な口調で、舞。

「俺は、一応、アズナーハンターチーム“ヘルウォーリアーズ”のリーダーなのさ」  
「なるほどね」

制限時間内にアズナーを全滅させる事が出来なければ報奨のエピトウを得ることはかなわず、アズナーの最優先攻撃目標とされるため、アズナー出現地点付近のアズナーハンター達は、バラバラに戦闘するよりも協力して戦った方が断然有利で、彼らはある意味チームであるが、アズナーハンターチームを名乗る集団も存在する。

賢のモットーは、“常に手抜き”だ。

理由は、賢は、自分にとって重大な結果のほとんどは努力以外の何か（家柄、親の経済力・人脈、一族の力、勤続年数、運など）によって決まると信じており、その上、疑

## アズナーハンター

り深い性格のため、全力を出すと何らかの集団・個人（犯罪組織、企業、政府機関、大金持ちなど）に、不当にシンクタンク等として利用される——自組織の構成員や自分がされると不快な事を賢に対して行い、賢が上手い対応をすれば、自分（達）がそれをされた場合に、賢が行った対応と同じ対応をする、等——確率が高いのではないかという懸念を、持っているためである。

そのような悪の集団・個人は子供のようなもので、賢を利用して一旦利益を得ると、非道な行いがエスカレートする可能性があると考えているため、“常に”手抜きをしているのである。

賢は、自分は完璧な人間であると自惚<sup>うぬぼ</sup>れてはおらず、「確率はかなり低いが、自分の考えが間違っている可能性がある」と思っている。

しかし、その場合——賢にとって重大な結果のほとんどは努力の影響を大きく受け、賢が全力を出せば高確率で不当に利用されるといふ懸念は杞憂であった場合——でも、「自分は何も重労働を行ったわけではなく、楽をしたにすぎないため、“常に手抜き”をモットーとする事に大した問題はない」と判断している。

ただし、対アズナー戦は別で、手を抜くことよって命を失う可能性を考慮する価値があるため、総力を尽くす事も少なくない。

そんな賢である。

## アズナーハンター

仲の良いアズナーハンター達とアズナーハンターチームを結成する事になり、メンバー達からリーダーになるよう依頼された際も、「割に合わない」と言って断ったが、何度も頼まれて渋々承諾した。

しかし、この想像を絶するハンターシステムは、賢の予測をこえていた。チームリーダーは、割に合うポジションだったのだ。

例えば、チーム「ヘルウォーリアーズ」対アズナーの戦闘で、賢が大した策ではないと考えている作戦が成功し、ミッションコンプリート——アズナーが制限時間内に全滅——した際、賢は後方において直接戦闘に参加しなかったにもかかわらず、全報奨エピソードの実に50%以上が賢のものとなったのである。

「……来たぞ」

緑の木々の先に見られる建造物上部群の上方に、多数の銀色紡錘形マシンが見られる。

「作戦は？ リーダーさん」

「射程内に入り次第、先頭のテルブを2人で集中攻撃。先頭を撃破した後は、次の先頭を集中攻撃して撃破する。以後、それを繰り返す。それでいいか？」

「OKよ」

2人のアズナーハンターは、表情を引き締めて、銃を構えた。

アズナーハンター 1  
<http://p.booklog.jp/book/65418>

著者：夏川 宙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/zcfzv5dyrd/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/65418>

ブックログ本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/item/3/65418>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ